

2021年10月17日 礼拝説教要旨

詩編講解説教82「弱い者の味方」

詩編82：1～8、マタイ9：9～13

第82編はこれまでとは少し趣の違う、特色のある詩編です。「神は神聖な会議の中に立ち、神々の間で裁きを行われる」（1節）直訳しますと「神は神々の集いの中に立ち、神々の真ん中で裁く」神さまが、神々が集まる会議の中で、これを取り仕切り、裁きを行う。神々の法廷、裁判がこの詩編の舞台です。

イスラエルにはヤハウエという唯一真の神さまのみを神さまとする信仰があります。宗教学的には一神教であり、他の神々を認めないという立場です。しかしその信仰を確立するのは容易ではありません。イスラエルの歴史は絶えず異教の神々に翻弄され続けた歴史でありました。エジプトで奴隷の時もエジプトの神々がありました。またエジプトを脱出してカナンに入植した後も、そこにはすでにカナン人の宗教がありました。バアルという神を拝む信仰がありました。このカナン人の信仰にイスラエルは影響を受けました。そこで立ち上がったのが預言者です。エリヤやエリシャの活躍がありました。エリヤとバアルの預言者との戦いは有名な話です（列王記上18章）。さらにイスラエルはアッシリアに攻め込まれ、北イスラエルは滅亡、やがて台頭してきたバビロニアによって南のユダ王国も滅びます。このアッシリアやバビロニアによる捕囚の経験が決定的でした。そこではイスラエルに異教の民が流入し、また異教の地に散らされ離散して行った人々はすぐにその土地の宗教の影響を受けました。そういう背景を踏まえながら、改めて詩編第82編を見ると、神々の中で唯一真の神さまが中心に立ち、他の神々を裁くという意味が見えてくるのではないのでしょうか。

そしてこのことは、わたしたち日本人にとりましても決して無関係の話ではないのです。日本は明らかに多神教の国です。神話の神々、八百万の神々を拝む土地です。公共の建物を作るときでも、神主さんをお呼びをしてお祈りをしてもらうことに何の抵抗も感じない。生まれたらお宮参りをして、結婚式は教会で挙げて、葬式は仏教ですること何の抵抗も感じない。それでいて「自分は無宗教です」と自慢げに話す。甚だ矛盾に満ちた自己理解です。そういう中で唯一真の神さまを信じ礼拝することの意味を考えていただきたい。

もう一つ、考えていただきたいことがあります。この神々というのは、単に異教の神々ということなのだろうか。無教会派の聖書学者である関根正雄先生が次のように記しているのは意味深いものがあります。「人間の世界は今日的に言えばイデオロギーとか、世界観とか、半神的なデーモン性をもったある種の霊的なものに支配されている。否、人間自身がみな小さな神々となって真の神に対し、また人間相互の間であくなく自己主張を続けているのである」。人間そのものが神々になる。確かに、人間の罪は、あの蛇の誘惑にあるように、唯一真の神さまを差し置いて、自分が神のようになるというものです。神のようになった人間が力を持つときに何が起こるのか。イデオロギーに支配された人間が力を持つときに何が起こるのか。力による支配が起こります。国家主義、民族主義的野望が生まれます。戦争が引き起こされます。偏見や差別が生まれます。それは歴史が証明するとおりです。人間そのものが神々となり、真の神さまに逆らい、また神々同士が権力争いをして、その結果が今の世界の現実となって現れているのではないのでしょうか。強い者が勝ち残り、弱者が顧みられない。3節にある「弱者」「孤児」「苦しむ人、乏しい人」は今すぐに助けを必要としている人たちです。そこに助けが行き届かない。

わたしたちの社会は今そうなっているのではないのでしょうか。コロナ禍でそれにますます拍車がかかっています。アフガニスタンでは親を失った子どもたちが飢えています。温暖化で世界中に食糧危機があります。にもかかわらず「彼らは知ろうとせず、理解せず、闇の中を行き来する。地の基はことごとく揺らぐ」(5節) ゆえに世界はおかしくなっているのです。だからこそ詩人は祈ります。「神よ、立ち上がり、地を裁いてください」(8節)

この祈りを神さまは聞かれ、この世界にイエス・キリストをお遣わしになりました。イエス・キリストがこの世の神々を裁き、不正をあばき、すべての驕りをあの十字架で打ち砕かれました。そしてよみがえりの命をもって、すべてに勝利され、真の神さまとしてすべてのものの上に立たれます。「神は、この力をキリストに働かせて、キリストを死者の中から復活させ、天において御自分の右の座に着かせ、すべての支配、権威、勢力、主権の上に置き、今の世ばかりでなく、来るべき世にも唱えられるあらゆる名の上に置かれました」(エフェソ1:20~21) キリストによる新しい統治を始めてくださいました。

そのご支配はどのようなご支配でしょうか。神々の支配のように弱者や孤児が捨ておかれるような世界を作るのでしょうか。そうではありません。今日読みましたマタイ福音書にもキリストの統治が示されています。主イエスは当時蔑まれていた徴税人のマタイを弟子にしました。彼に生きる目的、使命を与えます。さらに徴税人や罪人と呼ばれる人たちを家に招き入れ共に食事をなさいました。この人たちは人々から軽蔑され、隔離され、孤独に捨て置かれた人々です。その人たちに光が当てられ、もう一度生きる道を開いてくださった。交わりを与えてくださった。徹底して弱い者の味方になられたのであります。

今日の詩編の最後の言葉「あなたはすべての民を嗣業とされるでしょう」(8節) これは御自分のものとされるということです。キリストはあらゆる神々の支配からわたしたちを解き放ち、人生を贖い出してご自身のものとしてくださいました。その恵みのご支配を現しているのが教会です。教会は決してエリートの集まりではありません。何の問題もない、正しく清く生きている人たちがここに集まっているのではないのです。みんな弱さを抱え、欠けを抱えています。ルターは「赦された罪人」と呼びました。どんなに破れを抱えていても、それでも赦されて、キリストのものとされたことを喜び、わたしたちは礼拝をささげます。そしてそのようにキリストのものとされた教会は弱い者の味方になります。それはこの教会の頭であるキリストが弱い者を顧みてくださるお方だからです。他にもないわたしたちがキリストに顧みられ、罪を赦されました。そのお方の恵みを現すためにわたしたちはここに集められているのです。